

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字 NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS

<https://www.jrc.or.jp>

AUGUST 2021 NO.975

令和3年8月1日(毎月1日発行) 赤十字新聞 第975号 昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

8



わたしも赤十字 寄付の協力者 中野ゆうり (なかの・ゆうり) さん【P.5でご紹介】

特集

性暴力被害から24時間365日 救い続ける「日赤なごや なごみ」の活動

ひとりで苦しまないで

赤十字の最新情報を、SNSでチェック!



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 TEL: 03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

 **日本赤十字社**
Japanese Red Cross Society

性暴力被害から24時間365日 救い 続ける「日赤なごや なごみ」の活動

ひとりで苦しめないで

「あなたの望まない性的な行為は性暴力です。ひとりで悩まずお電話してください」

日赤愛知医療センター 名古屋第二病院内にある「性暴力救援センター 日赤なごや なごみ」は、強制性交や強制わいせつ、DVなどの被害者を支援する活動を続けています。従事しているのは日赤の医師、看護師、ソーシャルワーカー、外部の支援員(アドボケーター)など。司法や行政とも連携して、被害直後には治療や緊急避妊、証拠の採取を行い、時間が経過してPTSD(心的外傷後ストレス障害)を発症した方には専門家が“こころのケア”を行います。今年3月、コロナ禍でDV被害相談が過去最高になったという政府発表がありました。なごみスタッフが懸念しているのは、家の中で起きる性暴力被害や若年層被害の増加です。性暴力救援の最前線で支援を続ける、現場職員の声をご紹介します。

Case 1 娘さんが被害に遭われたAさんの場合*

1

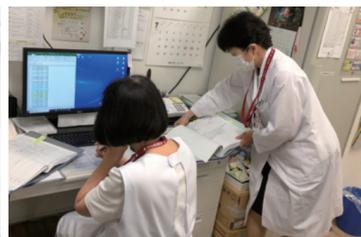
「1年前、娘から、ある親族から性暴力を何度も受けていると告白されました。なぜ気づいてやれなかったのか。娘も、つらくて眠れない日々だったようです。親族なので警察や児童相談所に相談したらどんな大ごとになるか…周りに知られたら娘がどう見られるか…誰かに相談したことを相手知ったら、私たちを殺しに来るかもしれない…。怒りと不安と恐怖で私も頭がおかしくなりそうでした。救いを求めてインターネットで性暴力被害のことを検索するうちに、なごみのことを知りました。でもすぐには電話を掛けられなかった。他の人に話すことが怖くて。勇気を出して電話できたのは、匿名でも相談に乗ってくれる、そして家族が寝静まった真夜中でもこっそり電話を掛けられたからです」

*個人が特定されないように内容を一部変えています

逃げられない「家の中」で起こる性被害 1日でも早く、苦しみから解放されるように・・・

娘さんの被害によってAさん自身も眠れなくなるほど追い詰められていました。このように親にもPTSD症状が表れるケースはとて多いのです。Aさんは精神看護の専門家による“こころのケア”を受けながら弁護士に相談を始めました。

2016年のなごみ開設以来、来所者693人のデータでは、性暴力加害者の4分の1が親族です。18歳未満の被害者を抽出すると、親族の中でも父親からの被害が32人(実父21人、義父11人)となっています。中には社会的に信頼されている立場の親が「子どもには虚言癖がある」と言うため、警察や児童相談所が児童本人の被害申告を本気にせず、家に戻されたケースも。なごみは病院が拠点になっているので、医療の専門家がチームで被害者の身体と心をケアすることができます。しっかりと証拠を押さえて、その子を困難な環境から救いだし、心の傷を癒やして自らの人生を歩めるように支援します。Aさんのように、夜間や深夜に電話を掛けてくる方は新規相談者の60%を占め、多くは、被害に遭った直後ではなく、時間がたっても苦しみが消えず、眠れなくなっている方たちです。もちろん、悩みや苦しみの深さに昼も夜も差はありません。昼間はアドボケーターが電話を受け、夜間はSANE(セイン/性暴力被害者支援看護師)が対応しますが、スタッフ全員が心掛けているのは、どうしたらその方の心に寄り添えるか。具体的な支援を始めるには、なごみに来てもらう必要があるため、自分の価値観を押し付けず、まずは誠意を持って傾聴します。被害者が深い心の傷を負いながら一人で警察や行政などを回るのは困難です。なごみに相談してくれば、一緒にそこを突破できる。なごみには協力してくれる警察・弁護士・福祉の専門家があります。昨年から、コロナ禍で外出を制限されたり、加害者と家に居る時間が長くなりつつある中で、被害を相談しにくい状況もあるのではないかと心配しているのですが、一日も早く、そして一人でも多く、SOSの声を上げられずに苦しんでいる被害者を救いたいです。(語り・医療ソーシャルワーカー 坂本理恵さん)



(左) なごみの鍵の掛かる棚には、被害者の相談記録がぎっしりと並び
(右) 来所の決心がつかない方が数十日ぶりに電話してくることも。過去の記録を探し出して相談に応じる



医療ソーシャルワーカー
坂本理恵さん

支援員が語る「打ち明ける勇氣」

なごみには開設当初から参加しています。性暴力被害者支援の研修を受け、電話対応を行う支援員(アドボケーター)をしています。電話は対面よりもその人を近くに感じるので、電話を掛けてくれるだけでも相当なエネルギーが必要なのだと分かります。とても苦しんでいて、でも他の人に相談できず、勇気を振り絞って電話してくる。コロナ禍で気になるのは、私に対応したケースでは10代の若い子の相談が増えていること。家に居られなくて、SNSで知り合った人と外で会うことが多い。加害者は、家に居場所がないという事情につけこんでいるのだと思います。



支援員(アドボケーター)
岡田尚子さん

Case 2 大学の先輩から性暴力を受けたBさんの場合*

2

「将来の仕事に生かそうと資格試験を受けようとしていたBさんは、その資格を持っている先輩から勉強を教えてあげる、と誘われ、被害に遭いました。なごみに電話してきたのは被害直後。精神的にダメージを受けて駅で動けなくなっていたので警察に保護してもらい、なごみで診療と証拠(検体)の採取、緊急避妊薬を処方しました。その後Bさんは、もっと必死に抵抗したら逃げられたのではないかと、自分も悪かったのではないかと自分を責め、食事がのどを通らなくなり、夜も眠れないので睡眠薬を飲むようになりました」(面談した熊澤看護師による説明)

*個人が特定されないように内容を一部変えています

「被害者にも落ち度があった」という周りの偏見 どんな状況でも、悪いのは完全に加害者

Bさんは緊急保護が必要な状態だったので本人に許可をもらって警察に連絡しましたが、なごみには警察から紹介された方もよく来られます(全体の相談件数の24%)。ただ、警察に相談しても実際に刑事事件として訴えるかという、「家族に知られたくない」などの理由で訴えない方が多いですね。なごみのスタッフとよく話すのは、**泥棒に入られた被害者は責められることがないのに、性被害に遭った身近な人ほど被害者を責めるよね**、ということ。「どうしてそんな場所に行った」「お前も悪い」「隙があったんじゃないか」と。さらに本人も「自分も悪いところがあった」と自己否定してしまう。人はそういう状況に置かれると、例えばそれが男性の被害者であっても、逃げられないし抵抗できなくなることがほとんどなのですが、誰もが「本気を出せば何とかなはず」と思い込んでいる。被害者にPTSDを起こさせる原因の1つが周囲の心ない言葉です。そして性被害のPTSDに苦しむ方の治療の第一歩は、被害者本人が「どんな状況でも加害した者が悪い。自分は悪くない」と理解するところから始まります。

私は、SANEの資格を取得してなごみに参加する以前、管理看護師長として患者さんと接している時、患者さんの様子に違和感を抱いてモヤモヤすることがありました。これはDV被害ではないか、性暴力被害ではないか、そう感じて本人が言い出さない限り、プライベートな部分には踏み込まず…。でも今はかつてのようなモヤモヤはありません。来所した方の身体と心を最初に診るのはSANEの役目です。根気よく、その苦しみに寄り添い、言葉にできない「思い」を考えます。そして、その方と力を合わせて、よりよい解決を手に入れるお手伝いをしたいと思っています。(語り・SANE 熊澤マサ子さん)



第二産婦人科部長 兼
総合周産期母子医療センター長
加藤紀子さん

ショックでしたが、これまで経験してこなかった小児の診療に慣れるため、個人で研修に参加するなどして頭を切り替えました。

なごみのような受け入れ施設ができて初めて、慢性的な子どもたちの被害の実態が表に出てきたと感じています。児童相談所などは被害を聞かされても証明しあげることができず、困っていたことでしょう。医療施設でワンストップの支援ができる、その意義は大きいですね。赤十字として「大きな災害救援に向かう」といった目立った活動ではなく、むしろ地味で秘められた業務ですが、**絶え間なく救い続けているこの「なごみ」は、とても赤十字らしい活動**だと思います。(語り・産婦人科医師 加藤紀子さん)

「なごみ」の活動
詳しくはコチラ→



「なごみ」の支援の様子を動画で紹介しています→
(8月中旬に公開予定)



性暴力被害者支援看護師(SANE)
熊澤マサ子さん

精神看護の専門家が語る「性被害のPTSD」

私は大学で精神看護学の指導をしています。週に1回、なごみで被害者の「こころのケア」、特にトラウマ及びPTSDのケアを行っています。性暴力を受けた方のPTSD発症率は6~7割。睡眠障害、食欲不振などから始まって、外出ができなくなったり、記憶障害が起こるなどして社会生活が営めなくなる。学校や会社をやめてしまう人も多いためです。たった1回でも性暴力はその人の人生を壊します。



日本福祉大学
教授
精神看護専門
看護師
長江美代子さん



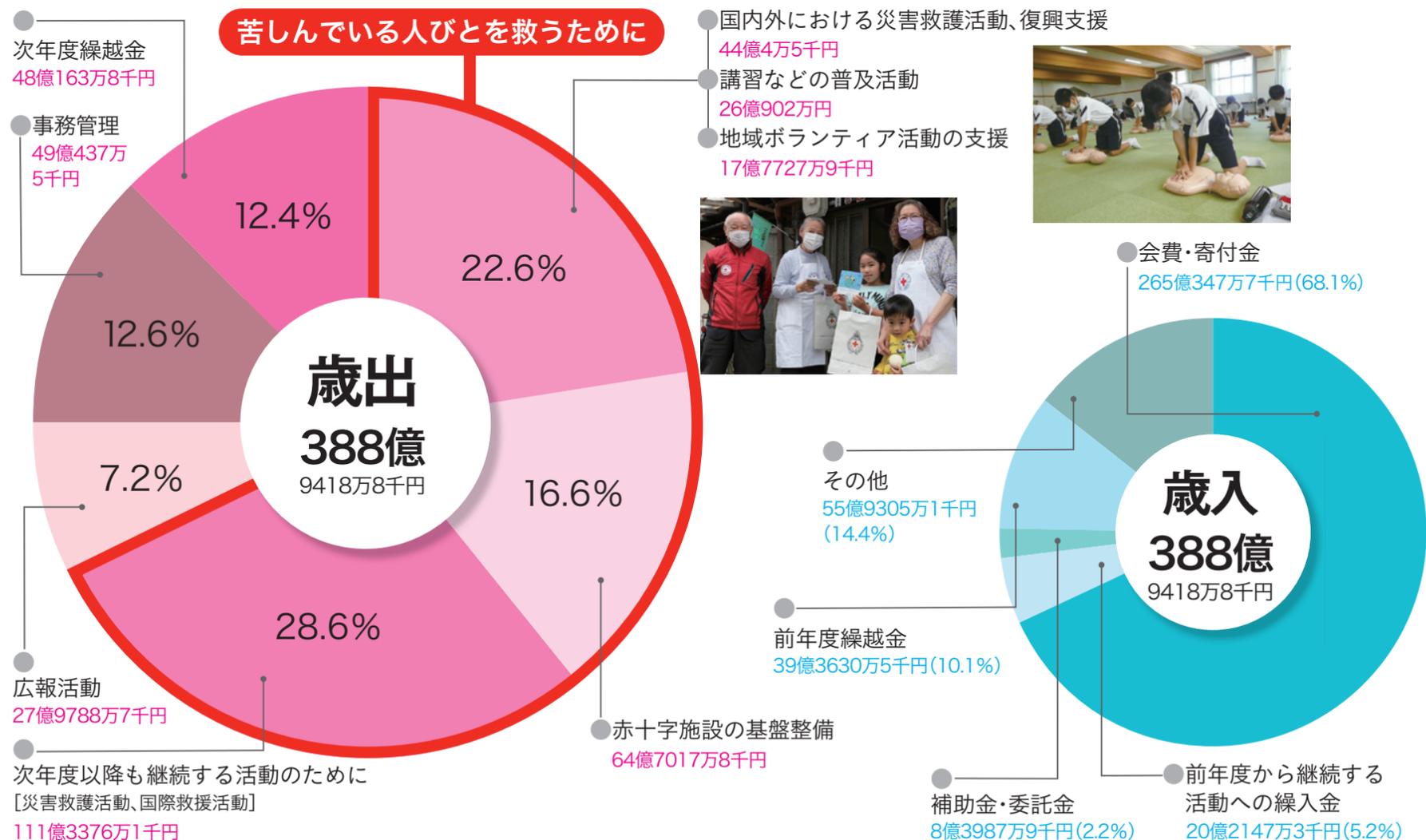
司法と連携するため、検体採取容器を警察から預かっている。証拠として、被害者の体内の尿・血液(薬を飲まれて被害に遭った場合)を採取し、鍵のかかる冷蔵庫・冷凍庫で一時的保管する

報告 令和2年度 決算概要

令和2年度、日本赤十字社は一般会計と3つの特別会計(医療施設、血液事業、社会福祉施設)をあわせて総額1兆2000億円を超える予算規模の事業を展開しました。このうち、個人・法人の皆さまからいただいた会費や寄付金を主な財源として実施した活動にかかる歳出歳入は以下のとおりです。



一般会計



全額が被災された方々に届けられます

災害義援金
70億5396万1千円

令和2年度に募集した11件の災害義援金の合計です。



詳しくは
こちら↓
アニュアルレポート P55
「収支報告ハイライト」



©Atsushi Shibuya/JRCS

注1) 本社・支部間で重複計上されている28億9021万7千円については、歳出・歳入から差し引いて表示しています
注2) 一般会計から医療施設特別会計への貸付金90億円については、歳出・歳入から差し引いて表示しています
注3) 千円未満を切り捨てているため、歳出と歳入それぞれの各項目の合計額と表示している合計額は一致しません

特別会計

医療施設

診療報酬を主な財源とする赤十字病院などの運営に伴う収入・支出です。

収入 1兆1510億4950万8千円

支出 1兆419億8476万6千円

差引額 1090億6474万2千円

血液事業

医療機関への血液製剤の供給による収入を主な財源とする赤十字血液センターの運営に伴う収入・支出です。

収入 1646億2085万4千円

支出 1503億8629万1千円

差引額 142億3456万3千円

社会福祉施設

措置費収入、介護保険事業収入などを主な財源とする各種社会福祉施設の運営に伴う歳入・歳出です。

歳入 189億9228万5千円

歳出 144億999万8千円

差引額* 45億8228万7千円

注1) 差引額は千円未満を切り捨てているため、差は一致しません
注2) 収入とは「収益的収入」、支出とは「収益的支出」、差引額とは「収益的収入支出差引額」のことです (*の差引額を除く)

令和2年度収支決算の特殊要因

- 新型コロナウイルス感染症対応のための医療機関に対する補助金が交付されました (約1000億円/医療施設特別会計)
- 個人、法人からの社資を多くお寄せいただきました (対前年度比約40億円増加/一般会計)
- 将来的な退職金支払いに備えた負債が減少しました (対前年度比約685億円減少/一般会計、医療施設特別会計、血液事業特別会計、社会福祉施設特別会計)

わたしも赤十字

今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。

赤十字を通して地域の役に立てたら…背伸びせず、自分らしく寄付を続けたい



寄付の協力者

なかの
中野ゆうりさん

佐賀県鳥栖市 / 27歳 / 会社員

中学時代にJRC(青少年赤十字)のリーダーシップ・トレーニング・センターへ参加したのが、私の赤十字との出会いです。その後、高校でボランティア部に所属したことがきっかけで、本格的に日赤佐賀県支部のJRC活動に参加するようになりました。東日本大震災の義援金募集や海外たすけあいの街頭募金活動をよく覚えていて、今でも街の募金活動を見かけると気軽に協力するなどしています。高校卒業後に就職し、会社の労働組合(青年部)に所属。若手組合員のボランティア活動の一環で、全員が毎月100円ずつ積み立てる「100円募金」の寄付先を決める際、九州各地で台風や豪雨災害が続いていたので、「義援金として日赤に託したらどうか」と提案し、実現しました。災害時に真っ先に駆け付けてくれる日赤を通して、間接的にでも地域の役に立てればという思いでした。青年部を離れた今、また何かできたらと

考えていた時、高校時代にお世話になった県支部の方からお声掛けがあり、今年から会員になることを決めました。JRC時代の友人とは今でも親しく、その中の一人が日赤の職員になっています。気づけばいつも赤十字の存在は身近にあり、改めて赤十字とはご縁があるな、と。これからも自分らしく自然体でボランティア活動や赤十字との付き合いを続けていきたいです。

寄付するあなたも赤十字です

- クレジットカードで寄付
- 郵便局・銀行の口座振替
- 郵便局・銀行の窓口
- お近くの日本赤十字社窓口



今月のクイズ

難易度：★★★

東大脳に挑め!

知識を深める赤十字QUIZ

出題 東京大学クイズ研究会(TQC)

知ってるつもりでも、意外と知らない赤十字のこと。東大クイズ研が手掛ける問題にあなたは正解できる!?

写真の人物は誰でしょう?



ヒント
綾瀬はるかさんが主演を務めた大河ドラマ「〇〇の桜」の主人公です!

同志社大学提供

この女性は日本赤十字社の会員として活躍した【 】です。

日清戦争や日露戦争で負傷者の救護に奔走し、日本のナイチンゲールと呼ばれました。



WORLD NEWS

マレーシアのコロナ最新事情

 マレーシア

3度目のロックダウンに疲弊するマレーシアで、ワクチン接種を赤新月社がサポート

COVID-19の感染拡大が止まらないマレーシアでは、市民の中でも特に社会的弱者の困窮が問題となっています。現地に派遣されている日赤職員に話を聞きました。



リポーター：
国際赤十字・
赤新月社連盟
アジア大洋州地域
ユース担当
平井万理子

食料および衛生キットを95万人へ
困窮する人々を救うマレーシア赤新月社

今なお猛威を振るうCOVID-19対策について、赤十字は世界中でさまざまな支援を展開しています。マレーシアの首都・クアラルンプールにある国際赤十字・赤新月社連盟(以下、IFRC)のアジア大洋州地域事務所には、昨夏から日本赤十字社職員の平井万理子が出向しており、アジア大洋州地域の赤十字・赤新月ユースボランティアの活動を促進する任務に従事しています。

「マレーシアでは5月末に人口あたりの新規感染者数がインドを超え、3度目のロックダウンの終わりがいまだに見えない状況です。特に感染が拡大している地域は局地的に封鎖され、規則違反者には罰金などが科される厳

格な行動制限が敷かれるに伴い、住民の孤立や経済的困窮が深刻な問題となっています。マレーシア赤新月社は行政と連携し、ボランティアによる戸別訪問も行い、支援が必要な家族や個人を選定。これまでに95万人以上に食料および衛生キットの支援を行ってきました。他にもマレーシア国内にいる2万人もの赤新月ボランティアは、ホットスポットと認定された建物の除菌活動も行うなど、各地で精力的に活動を展開しています」

一人でも多くの人を救うワクチン接種
寝たきりの人には自宅訪問も

マレーシア赤新月社はワクチン接種プログラムの国家タスクフォースのメンバーに任命され、ワクチン接種のためのボランティア管理や接種センター運営支援などの活動を展開しています。

「寝たきりなどで接種センターに足を運べない方については、マレーシア赤新月社の医師・看護師のボランティアチームが自宅を訪問してワクチン接種を行っています。また接種センターへのアクセスが難しい地域には移動クリニックを派遣。そのほか無国籍の移民



ワクチン接種のため寝たきりの高齢者を訪問するマレーシア赤新月社の医療チーム

の方々にもワクチンが行き渡るよう支援するなど、COVID-19によって最も影響を受けた社会的弱者の安全・福祉・生活を守ることを使命に活動しています」

同社の活発な活動は広く市民に知られており、さらにマレーシアでは高校までのすべての公立学校に赤新月クラブが設置されているため、若い世代にもボランティアや技術研修などを通じた人道教育が行われているとのこと。

「私が担当するユースボランティアたちにも赤新月クラブ出身者が多く、この状況下で積極的に活動しています。オンラインでの子どもたちへの支援を新たに始めるなど、時代の変化やニーズに合わせて行動する彼らの熱意とパワーを頼もしく感じています」



大量の支援物資を運ぶボランティア

赤十字、世界の「現場」から

supported by ICRC

赤十字国際委員会(ICRC)が展開する紛争地での保護活動や避難民支援。その活動現場で切り取られた、知られざる世界の姿、世界の課題。

1946年、フランスの捕虜収容施設で撮影されたドイツ兵捕虜。ノルマンディー上陸後、1945年5月8日にドイツが降伏するまでに連合国側のドイツ人捕虜は数百万人を数えた。戦勝国の世論は、ドイツ人捕虜を手厚く扱うことに反対。捕虜たちは極めて劣悪で過酷な状況に置かれた。

捕虜の待遇改善
に奮闘する
ICRCの活動⇒



捕虜の拘束は、兵士が戦闘に参加しないようにとどめておくもので処罰が目的ではない。第二次世界大戦前よりジュネーブ条約には捕虜の生命と尊厳の保護が明記されていたが、現実には多くの捕虜が命を落とした。条約はその反省から改正され、今日ではほぼ全ての国がこの条約を締結している。

